

# お薬のしおり

No.225 (R3.2)

東京医科大学病院 薬剤部

監修：東京医科大学病院 耳鼻咽喉科頭頸部外科

## 突発性難聴について

みなさんは突発性難聴とつぱつせいなんりょうという病気を知っていますか？突発性難聴とは、ある日突然耳が聞こえにくくなる病気のことで、感音性難聴かんおんせいなんりょう（音をうまく感じ取れない難聴）の一種とされています。また、一般的に40～60歳代が多いと言われていますが、最近では若い人での発症も多く、全体的な患者数が増えていることから現代病の1つとして注目されています。

今回は突発性難聴という病気とその治療薬についてお話したいと思います。

### ○突発性難聴の原因は？

ストレスや疲労、内耳の循環不全、ウイルス感染が原因であると考えられていますが、突発性難聴の明確な原因はまだ詳しくはわかりません。

### ○突発性難聴の症状は？

いつから耳の聞こえが悪くなったのか、はっきりと自覚できるほど突然に難聴が起こることが特徴です。突発性難聴の多くは片方の耳に起こりますが、まれに両耳が同時に聞こえなくなることもあります。また症状が重い場合、耳が詰まった感じ・耳鳴り・めまい・吐き気を伴うこともあります。

### 〔参考：耳の構造〕

**外耳**：耳介、外耳道、鼓膜を総称した部分です。耳介が音を拾い外耳道を通して、最終的に鼓膜へ伝わります。

**中耳**：鼓膜の奥にある鼓室、耳小骨と呼ばれる小さな骨を総称した部分です。鼓膜から入ってきた音が耳小骨で増幅され内耳へと伝わります。

**内耳**：音を感じ取る蝸牛、平衡感覚を制御する三半規管という器官があります。中耳から伝わってきた音の振動を電気信号に換え、蝸牛の中にある神経を通して脳に伝わり、音が聞こえたと認識します。



## ○突発性難聴の治療は？（当院採用薬）

飲み薬が処方されることが多く、副腎皮質ホルモン薬（ステロイド薬）・ビタミンB<sub>12</sub>薬・血流改善薬などが用いられます。

### ●副腎皮質ホルモン薬（ステロイド）

#### ⇒プレドニゾン（プレドニゾン<sup>®</sup>錠）

炎症を抑える作用、免疫を抑える作用などがあり、様々な疾患に対し処方されます。突発性難聴に対しては、急に起こる神経麻痺を改善する作用があります。

★症状が強い場合は入院で治療を行うことがあります。

#### 《ステロイドパルス療法》（水溶性プレドニン<sup>®</sup>）

飲み薬だと効果が得られるまで時間がかかるため、短期間でステロイドを大量に点滴する方法です。この際、短期間で大量に体内に入れた後、点滴から飲み薬に切り替えて少しずつ投与量を減らしていきます。

### ●ビタミンB<sub>12</sub>薬

#### ⇒メコバラミン（メチコパール<sup>®</sup>錠）

神経系の働きをスムーズにさせる効果があるとされているビタミンです。

### ●血流改善薬

#### ⇒アデノシン三リン酸二ナトリウム水和物（アデホスコーフ<sup>®</sup>顆粒）

内耳の血行を改善する効果があるとされています。

また、症状によってはステロイド鼓室内注入療法や星状神経節ブロック、高圧酸素療法が行われることもあります。

突発性難聴を発症した患者さんで、適切な治療を受けて難聴が完治する確率は約 1/3 と言われ、その他の患者さんは、改善はするものの難聴や耳鳴りの後遺症が残る場合や改善しない場合に分かります。そのため、治る確率を少しでも上げるためには何より早期治療が重要です。なお、1ヶ月を過ぎると聴力の改善が極めて困難になることから、難聴を発症してから遅くとも2週間以内に治療を開始することが望ましいとされています。耳に異常を感じたら、迷わず医療機関を受診するようにしましょう。

～お薬のことでご不明な点やご不安な点がある場合には、  
医師又は薬剤師までご相談ください。～

